# 第一章

# クラブ活動・各部の活躍

## 運動部・文化部

長い歴史の中で部活動の盛衰は否めない。それは川の流れのごとく変化し、あるいは海水の干満にも似ている。そして、ときにたくましい潮流のような力を見せる。

生徒の体位、感性、努力、指導、力の結集、時代の流れなど諸々の要素が集積されて栄光の花が咲くのだろう。

伝統を連綿と継承し、しかも上昇を辿るのは至難ではあるが、その青春の汗がやがて人生の糧となることは間違いない。だから熱中の時を過ごすことに価値があるのだ。

かえりみると、演劇や映画、弓道など、そのほかにも沢山の部が輝いたときがあり、そして消えて行った。

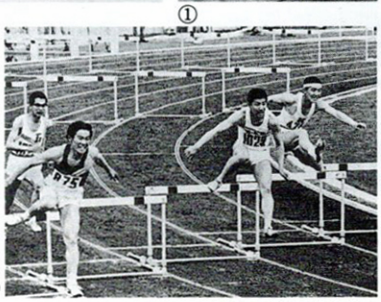
ここでは現存の部とクラブをとりあげ、また若干は割愛した。網羅してそれぞれのOBに原稿依頼をしたが、未着のいくつかについては先輩編集委員に補っていただいた。

### 陸上競技部

## 上位入賞あるも総合振るわず

大正一五年七月の石桜会規約には、単に競技部と名称し、本格的活動に入るのは生徒が充足した三、四年ごろからであった。

昭和七年に四年生の寺沢光一が県下中等学校陸上で砲丸投一位。八年に全国中等学校陸上選手権（明治神宮競技場）で一位。全国中等学校東西対抗陸上（甲子園競技場）で三段跳一位、砲丸投二位。とくにも三段跳一四㍍一〇は当時の中等学校最高記録でまさに快挙として県内外に報道された。寺沢の万能選手の影響で彼を軸に五年生の立花正三、横田孝、工藤。四年の田沼義男、大坪仁平、藤村信吉らも大いに活躍し、いわゆる第一期黄金時代を築いた。



陸上競技部 ①陸上万能の名選手・寺澤光一君 ②三段跳びの寺澤光一君 ③昭和43年

卓球部 ①昭和36年 ②昭和38年

九年には田沼が北日本中等学校陸上で砲丸投、一二年には若山純一が東北中等学校陸上で一〇〇㍍、太田重徳が二〇〇㍍低障害でそれぞれ一位。さらに太田は一三、四年と二〇〇㍍低障害、一一〇㍍高障害等で県下各種大会を制した。一五年に寺沢貢が砲丸投で県大会さらに東北中等学校陸上でそれぞれ一位に輝いたが、日中戦争の泥沼化が次第に濃くなり武道を中心とする格闘技の活動に傾くようになっていた。

戦後二一年、中等学校陸上競技大会が復活し、畑山光昭が一一〇㍍障害で、古川七郎が一〇〇㍍、二〇〇㍍で、それぞれ一位。さらに東北北海道陸上選手権で古川が一〇〇㍍、二〇〇㍍で、吉田が走高跳で、それぞれ一位。紙面の都合上これ以降一位入賞のみを挙げると、二二年に吉田が県大会走高跳で、二四年に滝波が四〇〇㍍で、二六年県高総体で佐藤が一〇〇㍍、二〇〇㍍で、中川が槍投、岩脇が砲丸投。二九年に東北陸上で太田が一一〇㍍障害、三二年に土村が県高総体で走高跳、三六年に栃内が槍投、三八年に山田が一〇〇㍍、五〇年に村上が一〇〇㍍。八〇〇㍍リレーでは、二五、六年、さらに三六年に優勝を果たしている。県高総体の総合では二六年には三位、二九年に七位と昭和の二五、六年は戦後第一期黄金時代、三八、九年は第二期黄金時代を築いた。しかし昭和四〇年代に入ると多少の生徒達のクラブ志向が変わったのか、低迷していたようである。

五〇年に村上亮が県高総体四〇〇㍍で一位。東北大会四〇〇㍍で七位。県民大会でも一位。五二、三年には小板橋広吉が走高跳で東北陸上、県高総体で上位入賞。その後、新人戦では五七年、一〇〇㍍で斉藤利克が一位、四〇〇㍍リレー一位。八〇〇㍍で工藤希典が一位と好成績を示すが、高総体での成績が振るわず残念な傾向が続いた。

ようやく五七年、渡部学が県高総体一〇〇㍍で好成績を挙げ東北大会出場となる。

六〇年代はこれぞという成果を挙げ得ず、平成一年に藤尾賢が数年ぶりで県高総体上位入賞、東北大会に出場。二年にも一一〇㍍ハードルで、吉田将吾が東北大会出場した程度で、長い低迷期が続いている。これは、戦前と違ってクラブ数の増加が招いた一つの現象なのか、志向の変化の現れなのか。

## 卓球部

## 四十年代初頭の連続優勝

卓球は歴史的に昭和五年の対盛工戦のころまで溯ることができるが、戦前より戦後に好成績を挙げている。ことにも三〇年代以降の活動はめざましい。シングルスやダブルスにおいて県大会二位以上の選手をあげながら述べれば、三五年の兼平、細川。三六年の籠屋、高井、藤倉。三七年の立花、斎藤。三八、九年には、佐藤、兼平の活躍で県高総体団体優勝。四〇年に佐藤、兼平、佐々木、新里をかかえて三年連続高総体優勝。四一年に佐々木、新里、松村、村上、佐々木、佐藤、下河原。四二年には松村、村上、佐々木、佐藤、下河原の奮闘よろしく、高総体優勝。四三年に佐藤、下河原。四四年には四役、天坂、四五年に熊谷、佐々木。四六年坊屋鋪、小原、佐々木、熊谷、

野球部 昭和30年甲子園出場に輝く野球部

ソフトテニス部 ①平成8年②インターハイにも連続出場

四七年熊谷、藤島、吉田で高総体五度目の優勝を果たし、インターハイにおいては、四二年と四七年は団体一六位であった。そして五〇年代もその余力はしばらく続いて、五〇年に田村、大久保、沢田などが活躍した。五一年県体で団体三位。五三年新人戦でシングルスで細川康生一位。五四年県体で団体二位。五七年高総体で団体三位となったが、卓球の力は次第に凋落の道をたどった。

しかし六〇年になって高総体で熊沢輝久がシングルス二位。県体で一位。新人戦で西野・畠山がダブルス二位。六一年には高総体で桜田肇がシングルス二位。県体で畑山昌彦がシングルス一位と一時的に復興の兆しを見せたが、長くは続かなかった。

あの四〇年代初頭の団体三年連続優勝という栄冠を再び掲げてほしいと願うこと切である。

## ソフトテニス部

### 創立以来県大会へ連続出場

東　幸男（新39回生）

本校ソフトテニス部（軟式庭球部）は、学校創立時より県の中心となって活躍している。昭和四一年までは五〇年史に記されているので、その後の主だった成績を挙げてみる。

「団体の部」では、

昭和五六年　県新人大会準優勝
〃　五九年　県高校総体第三位
〃　〃　県新人大会準優勝
平成元年　県高校総体第三位
平成五年　県室内大会優勝
〃　県高校総体準優勝
〃　県新人大会準優勝
平成六年　県室内大会第三位
〃　県高校総体第三位
平成七年　県新人大会優勝
平成八年　県室内大会準優勝

という団体の成績である。

また、個人ペアとして全国大会（インターハイ）に出場しているのは、次の各組である。

昭和四三年　中澤・栃内　組
昭和四四年　中澤・沼田　組
〃　四七年　瀬川・八重樫　組
〃　四八年　牧原・千葉　組
〃　五二年　澤里・新井山　組
〃　五九年　小向・佐々木　組
〃　六三年　田中・鈴木　組
平成五年　兼澤・長谷川　組
〃　六年　兼澤・長谷川　組
〃　七年　庄司・田村　組

部の記録としては創立以来県大会に連続出場を果たし、現在も更新中である。

さらに、平成七・八年度県高体「連強化指定校」に認定され、平成一一年に開催される「岩手インターハイ」に団体、個人ともに出場が期待されている。

## 野球部

### 冬の時代、しかし野球部グラウンドを得て

野球部の創設は昭和二一年。甲子園大会（五年ぶり復活）戦後初の第二八回全国中等学校野球大会県予選が大きな契機となった。当時五年

の山崎敬一・小泉一衛らを中心とした同好者で部を結成し、練習不十分ではあったが意気軒高として県大会に出場したが、優勝候補と目される盛岡中学と対戦8―0と敗れ初陣を飾ることができなかった。

伝統のない「できたて」のクラブには何の蓄えもない。常に用具不足や練習場難がつきまとったが厳しい練習と練習試合を増やして次第に自信をつけた結果、二六年夏の全国大会県予選に準優勝となり、奥羽大会出場権を得た。秋の県大会には、遂に初優勝をとげた。

実に創部六年目にしての快挙であった。この秋は東北大会でも準優勝を飾り当時の新聞紙上を賑わした。小武方信一投手の活躍がとくに光っていた。

二七年春の県大会優勝。ついで二八年秋の県大会優勝と岩高強しの声が高くなって来た。

こうした気運がさらに強まり、昭和三〇年夏ついに憧れの花の甲子園出場が実現した。創部一〇年目の出来ごとであった。この年の春から夏にかけての記録を略述し、詳細は「石桜五〇年史」から引用することにしたい。

『そのときのメンバーは、村川（投手）、田中（捕手・主将）、名久井（一塁）、平野（二塁）、板垣（三塁）、小泉（右翼）、佐々木（左翼）田口（中堅）、沢野（右翼）で、部長が戸嶋正夫、監督が川村昌司であった。

奥羽大会での優勝の喜びをじっくり味わうひまもなく、八月五日に盛岡を出発した選手たちは、七日に甲子園の土を踏んで初練習を行った。翌八日には、一回戦の相手が神奈川代表の法政二高と決まった。そして八月一〇日の開会式がやってきた。新宮高に続いて一七番目に入場した本校選手の顔は、誇らかな表情で輝いていた。入場式が終わり、第一試合の静岡高対城東高戦が行われたあと、いよいよ岩高対法政二高の対戦となった。新聞は、七分三分で岩高が負けると予想を報じていたが、不利な予想を覆して勝つというのが県予選以来のならわしとなっていたので、選手たちは少しも動じなかった。

本校勢は元気いっぱい試合にのぞみ、一回裏に先取点をあげ、三回と五回にも得点を重ねて三点とした。これに対して法政の打撃は振わず、3―0で岩高のシャットアウト勝ちとなった。勝因は村川の好投と田中の闘志、板垣の好打、さらに好走好守の内外野守備陣が一丸となって、強敵にぶつかったことにあった。こうして岩高は二回戦に進み、北四国代表の坂出商高と対戦することになった。

大会五日目の八月一四日、その岩高対坂出商高の熱戦がくり広げられた。本校は五回、小泉のレフト前ヒットを生かし、村川のショート右を抜くヒットによって一点を入れ同点としたが、七回致命的な二点を奪われ、善戦むなしく3―1で敗退した。選手たちの目にくやし涙が光る。』

○30年春季東北大会盛岡地区予選1回戦敗退
岩高3―8盛一
○全国大会県予選　1回戦一関二に勝つ
2回戦黒北に勝つ。3回戦花北に勝つ
準決勝岩高14―9一戸。決勝岩高2―0宮古高
○奥羽大会1回戦岩高4―0秋田高。
準決勝岩高4―0一戸高
決　勝岩高5―3八戸高
○甲子園大会1回戦岩高3―0法政二高
2回戦岩高1―3坂出商高

甲子園出場という校史に不滅の金字塔を建てて年は過ぎ去ったが、余勢はしばらく続いた。

三一年秋の県大会は二回戦岩高7―1盛工としたが、三回戦で敗れる。三二年春の県大会二回戦岩高5―1盛工としたが三回戦で敗れる。

あの頃の根性や力はどこへ去ったのであろうか。三三年から四〇年代全般を見れば、四二年春の県大会準優勝岩高0―9盛工と記録できるだけで、そのほとんどは地区予選すら通過することが容易でなかった。まことに厳しい冬の時代に入ったようなものであった。

五〇年に入って、夏の全国大会県予選では、一回戦岩高8―7盛農。二回戦不戦勝で三回戦岩高3―2宮商高、四回戦岩高1―9黒工高と久々の勇戦であった。また秋の地区予選では、一回戦岩高7―2盛四、二回戦岩高8―4盛三、三回戦岩高5―6盛農となかなか地区代表にはなれなかった。

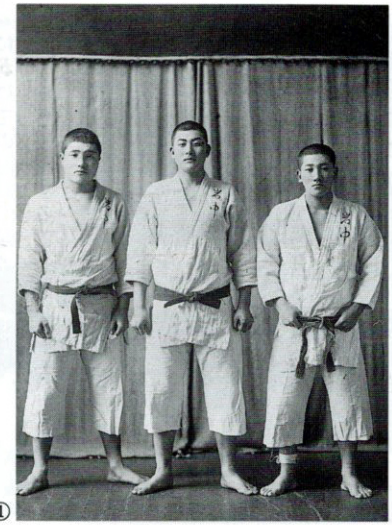
念願の地区突破をなして、五四年夏の全国大会県予選二回戦岩高5―4千厩高と戦ったが、三回戦岩高0―4花北高と、三回戦どまりであった。

六〇年代から平成年代を見ることにする。

六三年夏の全国大会県予選二回戦目釜石商に勝ち、三回戦一関工に敗れる。（スコア不明）

平成三年夏の県大会予選は一回戦岩高3―2一関工二回戦岩高5―3東和高、三回戦岩高5―6盛一、やはり鬼門の三回戦の壁は突破できなかったが、生徒会誌「石桜87号」に三年の吉田が、後輩が今後活動してゆく中で大切なこととして、第一に名前負けしないでほしい。相手がどんな有名校でも自分は岩手高校の野球部なの

柔道部 ①栄光の昭和17年頃②昭和38年春



①

②

だと、堂々と胸を張ってほしい。第二に努力することによって、自信を得てほしい。やはりしっかり練習したものが、自信をもって試合に臨み良い結果を出しているからだ。勝ちたいならば練習することだと書いている。

平成五年九月二八日。滝沢の巣子に五〇年来待望の野球グランドが造られた。面積一二二四〇・五平米である。充分な広さである。

野球部活動の条件は既に整っている。これからの精進を期待してやまない。

柔道部

## 黄金時代を築いて

大志田　武（旧12回生）

岩中柔道部は歴史が浅く、昭和三年（第1回生）になって初めて県下振武大会に出場した。

その後毎年大会に出場したが上位進出ならず、昭和一三年第9回生の赤坂俊夫氏（現石桜同窓会長）を中心とした強豪選手が揃い県下の各種大会に出場し、決勝または準決勝まで勝ち進んだが、古豪盛中・盛商高・岩手師範のいずれかのチームに破れ、優勝旗を手にすることができなかった。

昭和一五年から戦時体制下に入るや、柔道熱が一層高まり、昭和一六年第一二回明治神宮大会岩手県予選時には柔道部員が五〇名を超え、連日猛稽古に励んだ。

大会直前の夏休みに江刺甲子士部員（宮古）の父親（柔道愛好家）の招きで、宮古市内において強化合宿することになり、指導者に当時明治大学柔道部主将の門屋賢悟四段（宮古出身）、岩手医専（後の医大）柔道部の赤坂俊夫三段、石杜健二（先輩）三段を依頼した。

生徒は三年生以上有志二〇数名で、猛暑にめげず十日間猛練習に励み、予選大会には心身共に充実した東根清蔵（初段）、大志田武（初段）、佐藤幸郎（一級）が選出された。大会は武徳殿（岩手公園下）にて行われ（トーナメント式）、古豪盛商高・盛中に雪辱を果し圧勝。

決勝戦は体軀抜群の岩手師範と対戦、先鋒東根は背負投で一本勝、中堅佐藤は払い腰で一本勝、大将大志田ははね腰で一本勝、それぞれ自分の得意技で堂々三―〇で優勝し三人揃って県代表選手として選抜された。

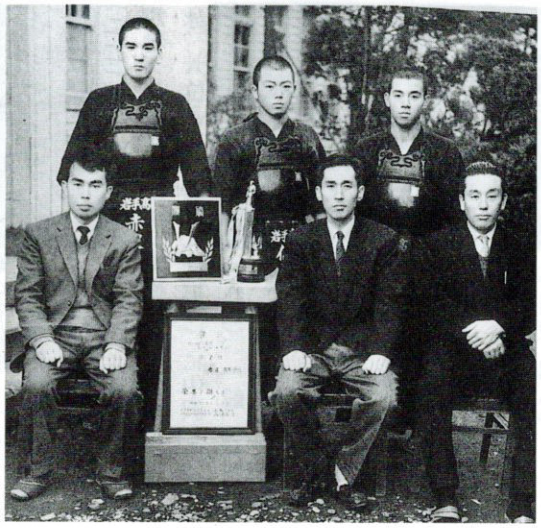
その瞬間岩手中柔道部創設以来の初優勝とあって三人が共に抱き合い感泣した。応援にかけつけた牟岐、山中の両先生始め応援団員も勝利を讃え喜んでくれた。

翌年（昭和一七年）の大会には赤坂祐三主将（現湯田赤坂病院長）を中心とした強力メンバーで優勝、翌々年には佐藤幸郎主将のもと強豪メンバーで優勝、三年連続優勝の快挙を遂げ、文字どおり岩中柔道部の黄金時代を築きあげた。

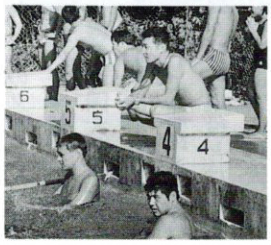
想起するに母校の温かい理解あるご指導、当時の細川唯三郎先生はじめ、先輩諸兄の母校愛に満ちた援助、そして各年次の名マネージャーの熱狂溢れる支えがあっての優勝であることを感懐している。

戦後になって三七年新人大会優勝、三九年東北高校県予選優勝、県体優勝、四一年高総体個人中量級優勝（島川）、新人大会優勝、四二年新人大会個人優勝（工藤）、四五年新人大会個人優勝（工藤）など記録されている。

剣道部 昭和38年春



①



②

水泳部 ①昭和42年東北高校選手権で優勝 ②昭和44年長崎団体で

## 剣道部

# OBとのつながりを絶やさず

工藤 聖人（新33回生）

わが剣道部には、体育系の中でも群を抜いて輝かしい伝統があり、その歴史には驚かされるものがある。創立の大正時代から昭和にかけて県内外ともにその名を轟かせ、成績は上位を占めない時がなかったほどであったという。今もなお、旧制中学時代の諸先輩方が挙げられた数々の成績や伝統が残っている。

また昭和三七年新人戦優勝、昭和四六年には、県民体の準優勝後、東北大会団体戦に出場されたOBによって、ある漫画家の作品「ムサシの剣」（剣道を題材とした青春もの）が構想される段階で、その著者へ剣道についてのご指導があったということも大変興味深い。

練習は、旧制中学時代においては大沢川原で行われ、その後、雨天体操場、講堂、町道場（新明館）、そして現在では体育館を利用しているので、条件は良くないものの、それなりの成果は挙げられている。

昭和五七年の県民体個人の部では、伊藤がベスト三位、六二年の県新人大会でも、強豪福岡高校を破り、団体で三位、平成元年の高総体並びに新人大会でも、団体戦ベスト八位、その年の県民体（個人戦型式）では、当時高二の丹野が副将の部で優勝するなど、毎年の高総体に出場している。最近では、平成六、七年に団体ベスト一六位となり、七年の大会では、福岡高校と1対2という、あと一歩の所で惜敗したことは、記憶に新しいことであり、同じくその年の県民体（個人戦型式）では、先鋒・次鋒・中堅の部の三名がベスト八位入りをしている。山や谷があるものの、成果は挙げられている。

毎年、夏には合宿を行い、OB会では先輩の方々に胸を借りる気持ちで稽古をつけていただき、その場で部員一人ひとりに細かく丁寧な指示を与えていただくなど、OBの方々とのつながりも、生徒の心身に多大な活力となっている。

最近では、少子化と相まって、武道人口の減少が進んではいるものの、その姿勢は衰えさせたくないものである。

## 水泳部

# 母校とともに70年の伝統

中村 轟（新15回生）

学校創立七〇周年とともに、わが水泳部も七〇周年である。大先輩には一回生の遠藤貫中先生を始め多くのOBがおり桜泳会を組織し、毎年お盆に親睦を深めている。

この伝統ある水泳部に、私は昭和三二年から三七年まで部生活し、四八年までの一〇年余、コーチ、監督をさせていただいたこの間を主に書いてみたい。

岩手中・高校プール（二五メートル、水深二・一メートル）昭和三〇年竣工（六三年取り壊す）、真白で真新しいこのコンクリート造りのプール（水泳部）に学年の大半は入部したが卒業時には藤原光邦と二人だけで今でも飲み仲間である。

今でこそ、五〇メートルプールで各大会が行なわれているが、四〇年代前後にはこのプールで高体連、県体が行なわれ、市内の水泳部、男

女が練習に来たものである。このプールでの猛練習の結果、中学では細矢邦夫が全国ランキング入りし、高校では中沢正博が全国大会出場、四〇年、慶大に進学、日本選手権に出場し、四〇〇メートル自由形で五位入賞と大活躍をした。

三九年、茂庭秀夫が入部、私も現役とは各大会に同行したが、茂庭とは六年間県内の大会はもちろん、東北大会、インターハイ、国体と全大会を同行した。四〇年には中学東北（福島）に参加し、そのまま盛岡に下車せずに高校東北（青森）へ現役と強行したこと。四一年インターミドリへの出場が決まり（入賞可能大）出発間際の不参加と無念の思い出がある。

四二年の東北大会（仙台）では、吉田正一キャプテン等三年生と二年生が確実に点数をとり、さらに一年生ながら茂庭の平泳、リレー等の活躍で新潟勢を破り、念願の初優勝、インターハイ（福井）、国体（埼玉）に多数出場した。茂庭は更に、四三年、インターハイ（呉）、国体（福井）、二〇〇メートル平泳、四位入賞、四四年、インターハイ（前橋）一〇〇メートル平泳、六位入賞、国体（佐世保）に中沢とともに出場した。中沢（岩銀に入社）、一般、自由形、四〇〇メートル、三位入賞、四五年、岩手国体、我が水泳部より一般、中沢、四〇〇メートル自由形、六位入賞、青年、茂庭、二〇〇メートル平泳、三位入賞、高校生、五人出場、小笹先輩と私が参加、更に多くのOBが役員として参加した。喜びも苦しみもともにした茂庭はいない（平成五年、没、四二歳）、更に四六年、インターハイ（高知）リレー等出場、四八年インターハイ（四日市）野呂久生出場、私としてはこのインターハイを最後に一七年余の水泳生活を終り、斉藤誠、中村秋雄、野呂、吉田実等若いOBに引き継ぎOBの集まりとアルコールには縁があるが、水（プール）とは疎遠になっている。

先輩達が学校にプールがなく、城南小プール、高松の池等での練習、三〇年代から我が校プールで風呂を沸かしての低温時の練習と夏の合宿、室内プールもなくシーズンオフは、陸上トレーニング、冬季及び春季合宿（志戸平）等厳しい練習で昭和四六年時点で、高体連、二三回中、一五回優勝、高校新人戦、九回中、七回優勝、更に県体においては、二三回中、一八回優勝（三二年より四四年まで、一三年連続優勝）、四二年、東北大会優勝、四三年、四六年、東北大会準優勝と輝かしい記録を残している。

栃内松四郎県水連会長を始め、岩根和夫、村井良和、吉田重治と歴代の県水連理事長が県水泳界と桜泳会をリードし、各先輩が築いた伝統とOBの協力（安達、藤原、越戸）、更に現役の頑張りがあったからこそ私も当時頑張れた。

若いOBと現役がこの伝統を維持し、母校と水泳部の発展に寄与することを望みます。

## バスケットボール部

### 反省から奮起を

戦前から校庭にゴールを置いて練習していたが、戦中は球技のようなものは皆消されてしまった。戦後復活して昭和二一年の県下中等学校籠球大会で三位、二四年から二六年にかけては県体や高総体で二位の成績を収めた。

しかし、ホームコートに恵まれず盛岡体育館や他校の体育館を借りるなど苦労が多かった上に、部員不足から幾度となく廃部の危機に立たされた。県大会に出れない年もあったが、Aブロックで頑張っているかと思えばBブロックに転落し（54年）、頑張ってAブロックに上がった（62年）かと思えばまたBブロックに落ちることを繰返し、県レベルでの優勝経験がない。よく走り込みがたりないとか、基礎がしっかりしていない、集中力にかける、何としても勝つという気迫がないと、反省しているが、これらの反省を活かして大いに活躍したいものである。

## ラグビー部

二上　憲育（新17回生）

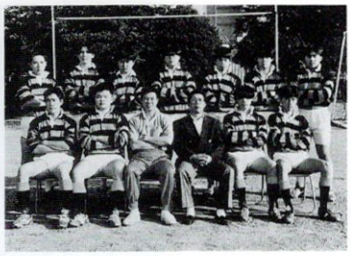
### まずAブロック定着を

高等学校のラグビー競技は、二九の高校が登録し、四ブロック制で行われている。

岩手高校は、AブロックとBブロックとを、往復しているのが、ここ十数年の状況である。全国大会の県予選が十月に行われているが、七月の県民体育大会が終わると、三年生は受験勉強でグラウンドでの練習が、ほとんど出来ないのが現状である。昭和六三年の全国大会県予選では、準決勝まで進み、宮古高校に54—10で惜しくも敗れている。平成二年の五月の連休には、秋田市に遠征し秋田工業に54—10　秋田中央に18—10と敗れはしたが、生徒の良い経験となり、その年の県民体育大会には、Bブロックで優勝し、Aブロック昇格を果たした。

高校総合体育大会、県民体育大会、全国大会

バスケットボール部 平成元年



ラグビー部 平成7年

バレーボール部 昭和28年県高校総体で優勝

県予選、新人戦と他校からマークされながらも、思うような結果が得られないので、先生もOBもはがゆく思う年度がある。平成八年度は、Bブロックでスタートし、六月の高校総合体育大会でAブロックに昇格し、この夏合宿でAブロックに定着できるチームに鍛えあげ、全国大会の県予選で活躍してもらいたいものだ。

OB会は、高校生の強化を目的に昭和四九年『石桜クラブ』を設立、高校生の指導にあたっている。石桜クラブは、県民体育大会でBブロック、盛岡市長杯リーグでは、Aブロックと健闘している。しかしOB会の目的である高校生への指導が、ここ数年低下していると思われる。OBの人々も合宿の時だけではなく、土曜日、日曜日には、母校のグラウンドに足を運び、練習をしながら高校生の指導をしてもらいたい。

この七〇周年を機に、OBと高校生が一体となり再び『岩手高校ラグビー部』の黄金時代を築きあげてもらいたいものだ。

## バレーボール部

高橋精四郎（新一回生）

### 優勢復活の兆し？

昭和五年本校に球技部が生まれ、主としてバスケットボール、バレーボールが行なわれた。排球部が誕生したのは現在地に新校舎ができた昭和一三年であった。秋に県下男子中学校第一回排球大会が行なわれたが、参加校は岩師と本校のみで、三対〇と敗れた。

一四年には第二回排球大会が行なわれ、参加校は三校となり二位だった。一七年までは部活動も活発だったが、一八年には戦争たけなわで、大会どころかバレーボール、バスケットボール、テニス、卓球などのボールを使う部はラグビー部を除き廃止された。

終戦になり、二一年に部が復活した。戦争直後であり、用具は残っていたもののボールが不足し、ドッジボールを借りて練習する有様だった。

春に戦後第一回目の中学排球大会が行なわれ、本校は花中、黒中を破り決勝まで進んだが惜しくも盛中に敗れた。その後二二年、二五年にも決勝に進み、そして二六年には高校総体でついに待望の優勝を成し遂げた。

また二八年にも同大会で優勝、三〇年には新人大会で優勝した。

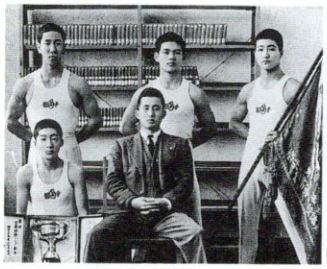
戦後九人制で県大会の優勝は三回、準優勝は二一年、二二年、二五年、二八年、三一年、三二年、三三年の七回、三位は二二年、二四年に二回、二五年、二六年、二九年、三二年、三三年、三六年の九回になる。

また全国大会には二六年、二八年、東北大会には三二年、三三年、北奥羽大会は二五年に出場した。

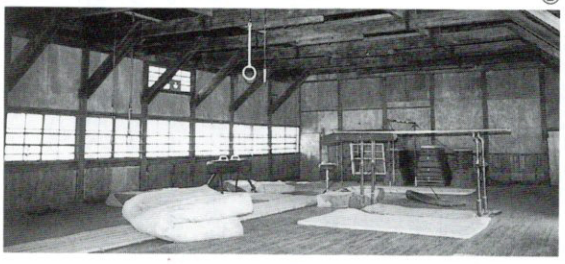
三七年の県民体育大会から九人制から六人制に移行した。三八年新人大会で三位、三九年高校総体で三位となり、四七年は三回戦まで進んだが、その後は部員不足ということもあり、県大会へ出場できない年が多くなった。

しかし平成六年に久々高校総体で三回戦まで進み、岩高バレー部復活のきざしが見えはじめてきた。

ハンドボール部 昭和38年



①



②

体操部 ①昭和36年 ②かつての屋内体操場

## ハンドボール部

# 善戦しながら苦杯

部の誕生は、昭和二四年である。以後二九年まで毎年高総体の決勝戦に進むのだが、優勝出来ず二位に甘んじる年が続いた。しかし三一年は士気があがり東北大会に進出できた。仙台で行われたこの大会は準決勝で山形代表の寒河江高校を八―三で退け、盛岡一との決勝戦に持ち込んだ。善戦したが六―七の僅少さで敗れ優勝を逸した。

その後三四年の高総体で二位となり、四二年の県体でも二位になった。しかし部員の確保も難しく不振をかこつことが続いた。五〇年代には準々決勝に進出したこともあるが敗れている。平成元年と平成三年にはベスト8にはいり、四年には高総体で準決勝に勝ち三位に入賞した。その後はまた一回戦負けが続いている。今後の奮闘を望んでやまない。

## 体操部

# わが校のお家芸と自任

足澤　至（旧15回生）

機敏で器用な生徒が運動会に、みんなの前で演技をして見せるぐらいのものであった体操が、県内で競技会形式が取り入れられ、大会が初めて開催されたのは、昭和一四年である。

一五年には第二回の県下中学校体操競技会が開かれ、岩手師範学校、盛岡中学校の参加選手に混じって岩手中学校からは、旧制中学一一回生の鳴海凱里が出場、予選を堂々と勝ち抜いて明治神宮大会に出場している。

戦争で一時中断していた競技会は、県体操協会の結成された昭和二一年に、盛岡高女体育館で復活第一回の大会がもたれ、これに出場すべく当時体育教師前沢肇先生の指導のもとに鳴海正人(旧18)、三浦友義(旧18)達が、あの薄暗い、裸電球の体操場（旧剣道場）で始められた。なにしろやる気充分でも満足な器具は一つもなく、総て暗中模索の手作りに頼るしかなかった。

流木の丸太に藤の蔓で作ったポメルをはめ込んでの鞍馬、木製椅子の部分の輪を削って作った吊環、建具大工さんに作ってもらった平行棒、大分後に小川長春館の木製平行棒を購入してもらい、喜びのあまりわれを忘れて、来る日も来る日も練習に打ち込み、脇の下や向こう脛のあざが絶えなかったこと等が思い出される。再三にわたる学校へのお願いで、体操場に鉄棒固定の床上金具取付が許可されたものの、天井が低く車輪、宙返りの練習がままならぬため、無断で梁を切り落としたりした事も今では、楽しい語り草の一つになっている。

また徐々にあがる競技成績に学校当局も理解を示してくれ、勢能の平行棒を買っていただくことになるが、とても高価な鞍馬には手が届かず、夏休みを利用して部員全員、甲子園予選の行われる市営球場でアイスキャンデー売りのアルバイトをして貯めたお金で鞍馬を購入、技術的なものはもちろんのこと、部員の団結と体操に対する情熱は、いやが上にも向上した。

今日のようにテレビ、ビデオ等での技術修得はできず、本間茂雄の「鉄棒運動」は唯一頼り

になる本であった。従って中央で開催される全日本選手権大会とか早稲田大、日体大の合宿所見学に、土曜日の夕方夜行列車で九時間もかけて上京し、日曜日の夜行で帰って来るという強行軍を度々決行し、それでも一日として学校を休んだり練習を休むようなことはなかった。

施設、設備の充分でない体操場で、先生と生徒が一体なり、楽しい中にも血の滲むような練習が効を奏して、数々の栄光、戦績を残した体操部は、数ある運動部の中でも岩手高校のお家芸に属する種目ある。

高校総体では、昭和二三、二四、二七、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、四〇、四四年度の一二回の優勝をなしとげ、それぞれインターハイに駒をすすめている。県内大会、東北大会の上位入賞は枚挙に暇がないがインターハイ、国体での主なる成績をあげると次の様になる。

●二一年国体(京都)　個人総合九位　鳴海正人
●二二年国体(石川)　跳　馬　四位　鳴海正人
〇二六年ヘルシンキオリンピック
予選出場鳴海正人
●二五年インターハイ(神奈川)
個人総合六位　小林陵二
徒　手　一位　小林陵二
●二五年国体(愛知)
団体総合三位　小林陵二、斎藤勉
平行棒一位、鉄棒四位　小林陵二
跳馬三位、平行棒六位　斎藤　勉
●二六年インターハイ(茨城)
跳　馬三位　村上　昇
●二六年国体(広島)
団体総合七位　村上　昇
●二七年インターハイ(京都)
個人総合一〇位　村上　昇
跳　馬四位　村上　昇
〇三一年メルボルンオリンピック
予選出場　村上　昇
●二八年インターハイ(埼玉)
タンブリング五位　遠藤政二
●三五年インターハイ(長崎)
鞍　馬七位　五日市享児(規定一位)
●三六年インターハイ(神奈川)
個人総合一一位　米澤正道
跳　馬　二位　米澤正道
インデアンクラブ三位　菊池康弥
●三六年国体(秋田)
団体総合八位　米澤正道、佐々木健雄
個人総合六位　米澤正道
跳馬二位、鉄棒・鞍馬三位　米澤正道
●四五年国体(岩手)
団体総合九位　松井保憲、細川文男

最近は、目立った成績は見られないが、本校卒業生が県体操協会長・副会長・理事長・事務局長と県体操協会の重鎮として活動しており、後輩諸君の尚一層の奮起を望んでやまない。

**山岳部**　牛抱　政行(新26回生)

## 山への誘(いざな)いを得て

石を詰めたザックの重さは二〇キログラムはあっただろうと思う。角が背中にあたる痛みに耐え、ただひたすらアスファルトの道を歩き続ける。すれ違う女子高生の視線をかわしながら、黙々と歩き続ける。実に奇妙な光景だったに違いない。山歩き用の体をにわかにつくり上げるためにはどうしても欠かせないトレーニングであったのだ。初めのうちは校地内を周回するのが日課だったが、距離を少しずつ伸ばして、高松の池へ、桜山神社へと、次第に妙な格好は多くの人たちの目にさらされることになっていった。

三年生がわずかに一人。つぶれかけていたところに、昭和四六年四月、新入生が六〜七人入ったために岩高山岳部は息を吹き返した。そして三年後、わが山岳部は県民体育大会山岳競技で優秀パーティーに選ばれ、千葉国体出場を果たしたのである。そして、全国第四位の記録を残した。

松川キャンプ場がわれわれのベースキャンプであった。土曜日の午後、柏台までバスで、そこから約一〇キロメートルの道のりを完全装備で歩く。キャンプ場では、テント設営、炊事、天気図の書き方等を訓練し、技術の修得に励んだ。翌日は松川コースをたどり、岩手山頂にアタックする。これをほとんど毎週続けた。

またあるときは、学校から柳沢まで自転車で行き、キャンプ。翌日、馬返し(岩手山正面登山口)から岩手山頂にアタックをしたことも何度かあった。費用をかけずに、しかも実際に登山をしながらの技術の習得をするためにはこんな方法しか考えつかなかったし、他に知恵もなかった。感謝したいのは、顧問の先生(藤村正一先生)に対してである。とにかく山へ、山へといざなってくれたのだから。

山岳部 昭和51年

①

②

アイスホッケー部 ①昭和21年冬盛岡中学に勝って ②昭和43年

岩高山岳部の歴史にこのような栄光が刻まれていたことを知る人はそう多くあるまい。しかし、水泳部や体操部と同様に輝かしい歴史を拓いた時期もあったのである。歴史を受け継ぎ、励む部員がいると聞く。祈、健闘。

## アイスホッケー部

伊藤昭一郎（旧17回生）

### 輝ける戦績

昭和一七年九月伝統ある岩手中学アイスホッケー部に入部した。同級生は、佐々木秀勝、内田庄吉（旧17回生）と小生の三人であった。最上級生は高田玄二郎、赤坂祐三、一方井安治、太田重義、四年生太野登（GK）、川村裕、高橋秀蔵、三年生大沢靖、筧良夫、岩崎卓郎、二年生大山哲男、出渕肇、藤沢道男、諸先輩と一緒だった。

盛岡中学、八戸中学に勝った東北大会で優勝した頃でした。当時岩手医専には、太田重徳、寺島国男（旧8回生）先輩が、華麗なる雄姿を高松の氷上で乱舞して、全国専門学校大会で準優勝したのもこの頃だったと思う。

翌一八年は戦時中でもあり、敵国スポーツ中止により、休部となった時代でもある。それ以前は川崎武久（旧6回生）先輩が明治大学のアイスホッケー部で活躍し、岩手中学に初めてボディーチェックを導入したとも言われていた。

また、日本大学には作山実（旧10回生）、高田玄二郎（旧13回生）は中央に進出したが、やはり戦時中で一時中止だったと言われている。昭和二〇年の終戦の秋に、再びアイスホッケー部を復活したのは、私ども（旧17回生）だった。監督は佐藤清八郎（旧11回生）先輩で、高松の池に合宿し練習していたが、練習中毎日のように先輩が復員してきて、しごかれたものである。

早朝練習に先輩チームと練習試合を行った。先輩に勝ったら朝食をさせると言って、終日食事を取れなかったこともある。川崎武久先輩、中村勝二先輩、佐々木宗七先輩、作山実先輩、大崎正夫、鹿内祐介、佐藤喜代治先輩が戦後松尾鉱山にチームを作った方である。

練習の結果盛中に2—1で勝ち、県連より岩中、盛中と混成チームで八中に遠征してやはり2—1で勝ったのもこの頃だった。

岩手日報は八戸が脚力が勝り優勢であったが、GK伊藤の好守備で勝ったと掲載していた。

翌二一年は第一回の国体もあって、雪ノ浦弘（旧17回生）も加わりチームが向上したが、苫小牧工業に敗れた。その年が明けて二月だったと思うが、関東選手権の名称で準日本選手権大会が日光で開催されて、オール岩手中学の名称で川崎武久、鹿内祐介、立花喜久男（旧9回生）、赤坂祐三、一方井安治、作山実、佐々木宗七先輩に混じって小生と雪ノ浦弘、小林徹生の中学生三名が参加して、第一回戦は全早稲田大学と2—3で勝ち、二回戦は日本代表と言われた慶応OBチームと戦って互格に勝負したが2—3で敗れた。

翌日の岩手日報には小生のGKの防御が悪く敗退したと書かれた。翌二二年に卒業して小生は日大、佐々木秀勝は早稲田、石川光悦は明大へ、盛中のキャプテン瀬川洋は日大、川村裕日大に進学、岩手医専には赤坂祐三、出渕肇、盛

岡工専には一方井安治、日大の学部に高田玄二郎、作山実先輩が入学した。

翌年二三年に東京八大学対抗戦があって、そのほとんどのチームが満州の中学卒が過半数を占めている中で、小生の日大チームに苫小牧中の石井、苫小牧工業の黒川、盛中の野村が加わり、予想は一勝もできないレベルと称されたが、初戦明大に、二回戦は中央大、決勝は立教に二ピリまでリードしたが、力尽きて準優勝になったのもわが岩手中学勢の底力を見せたものと思う。

また、太田重徳先輩が亡くなり当時素晴らしい選手であったことを記念して中学生大会に太田杯大会を開催したこともあった。

第二回国民体育大会が長野であり、国鉄工場が北海道を破り優勝した。このチームに名ディフェンス中村一二(旧9回生)そして大崎正夫(旧11回生)がいた。

翌年二四年小林徹生(明大)雪の浦弘(慶大)中嶋勇(法大)北田昭三(法大)立花茂理栄(法大)渕沢敬吉(法大)をはじめ、その後平成に至るまで数多くの部員が各大学に進学活躍したのは、先輩の活躍と歴史に加え、部長になった故日野岳浩(2回生)先生の母校に対する功績は偉大であり賞賛されるものと思う。

ふり返り、戦後大変な時期、食料が無く仕事が無い時、佐藤清八、赤坂祐三、佐々木宗八に監督して頂いた事は当時の部員に代り厚く感謝致します。

また地元の岩手医大には、赤坂祐三主将の下に出渕肇、大山哲男に小生が加わり全国医大リーグの連続優勝の歴史も岩中魂の成果の現われでした。この時期頃から高松の池の氷結が遅くなり、一一月初旬より松尾鉱山の蔭沼に佐藤喜代治先輩のお世話にて岩中、医大の合宿練習ができた結果とも思います。

戦後半世紀を経た今日まで岩高時代に、国体インターハイ準優勝2回あったと記録されています。母校創立70周年を機会に再び優秀なる戦績を残すことを期待しております。

なお、平成元年から四年までインターハイ連続出場。

## スキー部

### 後援会も発足して

昭和九年県下中等学校スキー大会で一条竜彦は飛躍競技で一位、10キロ競争で三位、そして20キロ継走で二位、総合では古豪岩手師範についで二位、続く県下スキー大会では一条竜彦が複合飛躍一位、純飛躍一位、20キロ競争で立花が一位と大活躍をして一躍有名になった。

このように、戦前は幾多の名選手を排出したスキー部ではあったが、戦中はスポーツも軍事一色になってしまった。戦後復活したスキー部の二十年代は目立たない存在であった。

三〇年頃から部員も増え本格的に合宿をやり次第に頭角を表すようになった。県下高校スキー大会で三五年は総合順位7位、三六年5位、三七年4位、三八年5位、三九年6位、四〇年5位と期待が持てるようになった。

しかし、四〇年代は見るべき成績が挙がらなかった。四九年は男子総合9位、五一年1月の県民スキー大会において七〇メートル級純飛躍で中野拓が2位に、高校の県大会で5位に入賞した。中野はインターハイにも出場して気を吐いたが、その後はこれぞという成績を上げることなく推移してきた。

平成元年一年生が沢山入部し、元気が出たのか、二年には二年連続で東北大会に出場し、第四シードから第二シードに躍進、一〇数年ぶりに活気を見せた。

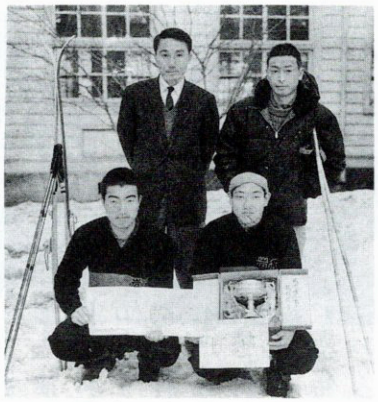
その後はまた低迷を続けているが、平成七年には岩手中高スキー部後援会が発足し、保護者の方々、車を出してくださる方々など、力を入れてくださるようになった。今後の努力に期待したい。

## テニス部

### 年三回の合宿で精進

軟式庭球部と異なり創部間もない。当初部への昇格とインターハイ出場を二つの目標として精進したが、平成五年春、部に昇格し、翌六年には県高総体において初優勝しインターハイに出場した。創部数年にして、彗星のように現われめざましい活躍を続けている。

正月の二日にはトレーニングを開始するとか。春、夏、秋と年三回も合宿をやるとか、旺盛なファイトを燃やしている新進のクラブである。七年はクラブを作って五年目というのに、畑中幸信の県ランキング一位、菅野の新人戦で高校のチャンピオンになり東北代表となり、海外遠征もしたという頼もしさである。



スキー部 昭和38年

テニス部 平成6年

サッカー部 平成3年創設のサッカークラブ

七年度出場したいくつかの大会の成果を挙げてみると、

県ジュニア選抜室内テニス
シングルス　優勝　畑中幸信
　　準優勝　小原雄宇
ダブルス　準優勝　畑中、佐藤
県高総体
団体　準優勝
シングルス　優勝
ダブルス　優勝
・インターハイ出場果たす
東北総体
団体　三位　一戸、高橋
ダブルス　準優勝　畑中、田代
県民体育大会
シングルス　優勝　畑中
ダブルス　優勝　小原　田代
　　準優勝　畑中　菅野
新人戦　団体　準優勝　東北選抜出場
NHK杯　ジュニアの部
シングルス　優勝　菅野
　　東北選抜ジュニア出場

今後ますますの活躍に期待したい。

## サッカークラブ　山本幸一（新16回生）

### クラブ創設・そして初出場

岩高にサッカー部がないことを知りながら入学せざるを得なかったM生徒のスポ少時代の指導者からの依頼と、本人の熱意で、ともかくサッカー同好会が誕生したのは平成三年四月二九日、岩手医大グランドの片隅ででした。

折りしもJリーグ発足の前で、サッカーブームに乗じての、また小生には母校への恩返しのつもりでの創設でもありました。

一部教師の予想外の厳しい反対の声は続いたが、理解ある生徒会の賛同、「サッカーが好きだ」という生徒、そしてボールもグランドも無いジプシー生活の状況を察しての社会人チームや他校のサッカーマンの好意で、何とか今までやってくることができました。

その甲斐あってか平成五年サッカークラブ昇格と同時に、全国高校サッカー選手権大会県予選に初出場を許され、一回戦を突破し「初出場、岩手高校」とテレビで放映されたことは記憶に新しく、平成七年には三回戦まで進みました。

かの生徒（村田大）は現在名門東海大サッカー部でトップをめざし、厳しい練習を続けており、続く後輩の中にもスポーツの道を歩む者が出てくるようになりました。

わがサッカークラブは下手でもよいから真面目に練習をし、「岩高でサッカーをやってよかった」と感じて卒業してくれれば、初期の目的は達成されたと思います。

しかしいつの日かレベルアップを計り、古豪に一泡吹かせたい夢もあります。そのためにも少しはボールを蹴れる一年生が入ってほしいのと、ボールを蹴れる環境に学校サイドが前向きに対処することを期待するものであります。

（サッカークラブ監督記）